

知的障害者の高齢化によって変化する生活実態と支援方法
～就労継続支援 B 型事業所での調査研究に依拠して～

同志社大学社会学部社会福祉学科

11009202079

樽本澄伶

指導教員

鈴木良

〈梗概〉

日本社会では高齢化が進行している。知的障害者福祉の現場でも例外ではなく、利用者
の高齢化が進んでいる。そのため、利用者の高齢化に伴い、知的障害と従来の介護のどち
らの側面も補う様々な支援が求められる。本研究の目的は、知的障害者の高齢化によって
変化する生活実態と支援方法を明らかにすることとテーマを設定した。研究方法としては、
知的障害者の高齢化に関わる先行研究を整理したうえで、社会福祉法人が運営する就労継
続支援B型事業所の職員に対してインタビュー調査を行った。

この結果、高齢化に伴う生活実態としては1) 加齢による変化、2) 認知機能の変化、
3) 身体機能の変化、4) 加齢の自覚、支援方法については、1) 高齢者問題に配慮した支
援と連携、2) 就労以外の居場所、3) 高齢者化に伴う高齢関連施設に求められる支援、
が明らかになった。

目次

序章 研究の背景と目的・方法

第1節 研究の動機

第2節 知的障害者の現状に関して

第3節 研究目的と方法

第1章 先行研究

第1節 入所施設における知的障害者の高齢化と現状

第2節 知的障害者の高齢化に伴う居住支援の現状について

第3節 知的障害者の高齢化に対する厚生労働省による検討

第4節 知的・発達障害者の高齢化と支援の課題について

第5節 先行研究まとめ

第2章 インタビュー調査

第1節 調査概要

第2節 調査結果と考察

1.高齢化に伴う実態

1.1.生活の変化

1.2.認知機能の変化

1.3.身体的な変化

1.4.加齢による認識

2. 高齢化に伴う支援の変化

2.1. 高齢化問題に配慮した支援と連携

2.2. 就労以外の居場所

2.3. 高齢関連施設に求められる支援

終章 結論

参考文献

謝辞

序章 研究の背景と目的

第1節 研究の動機

私が知的高齢者の高齢化について関心を持ったきっかけは2022年8月1日～9月2日の間に社会福祉実習にてお世話になった知的障害者の方が働く社会福祉法人ライフサポート協会就労継続支援B型事業所オガリ作業所での体験からだ。オガリ作業所では知的障害者の方が働かれており、ほとんどの利用者の方が40代後半から70代後半であった。

また、オガリ作業所での実習を経て、高齢化によって知的障害を持つ利用者が以前のようにできなくなっていることがあると知った。この経験から私は知的障害を持つ方が高齢化するにあたり、どのような変化があるのか、その変化に対応した支援の実態を明らかにし、どのような支援が今後求められるのかについて、研究をしたいと考えた。

第2節 知的障害者の現状について

令和5年版高齢社会白書（全体版）によると日本の総人口は、令和4年10月1日の時点では、1億2,495万人となっている。その中でも65歳以上人口は、3,624万人となり、日本の高齢化率は29.0%となった。

知的障害者の現状としては令和三年障害者白書によると、在宅の知的障害者96万2千人の年齢階層別の内訳から、18歳未満21万4千人（22.2%）、18歳以上65歳未満58万人（60.3%）、65歳以上14万9千人（15.5%）となっている。身体障害者と比べて18歳未満の割合が高い一方で、65歳以上の割合が低い点に特徴がある。

知的障害者の推移をみると、2011年と比較して約34万人増加している。知的障害は発達期にあらわれるものであり、発達期以降に新たに知的障害が生じるものではないことから、身体障害のように人口の高齢化の影響を大きく受けることはない。以前に比べ、知的障害に対する認知度が高くなり、療育手帳取得者の増加が要因の一つと考えられている。

第3節 研究の目的と方法

今回の研究の目的としては、障害者が高齢化し、介護が必要となった場合、どのような支援が求められるのか、知的障害者の高齢化の現状、実際に行われる支援について明らかにすることを目的である。研究の方法としては、知的障害者の高齢化に関わる先行研究を整理し、社会福祉法人ライフサポート協会オガリ作業所の職員に支援員目線での知的障害者の高齢化による変化、支援の現状についてのインタビュー調査を行った。

第1章 先行研究

第1節 入所施設における知的障害者の高齢化の現状と課題

第1節では、入所施設における知的障害者の高齢化の現状と課題に関わる先行研究についてみていく。知的障害者が入所する施設における現状と課題について、社会福祉法人愛護会において、研究がされていた。知的障害の有無にかかわらず、障害者の加齢には同様の変化が基本的には見られるが、その変化に関しては、多少特徴が異なるとした。一般的な高齢者の支援として、個別に応じた状態像など把握したうえで、視覚的配慮、構造化の工夫、身体機能低下への配慮など総合的な配慮が必要であるとされている。しかし、知的障害者の場合は、加齢に伴う生活機能、特に心身機能の低下は、新たな生活障害が生み出される可能性があるとされている。病気への耐性が弱くなり、新たな病気や怪我のリスクも高くなる可能性についても考える必要がある。そして、身体面だけではなく、精神面での変化にも十分な観察が必要であるとされ、入所者に対する支援者の言葉がけや配慮によって、支援される側の気持ちは変化をもたらされ、生活をより、生き生きとしたものへと変化させることができるとされている。

支援者都合よりも、支援される側の目線を常に持ち続ける事がより良い支援につながるとされ、障害者への支援のみならず、加齢に伴う具体的支援にも役立つものであるとした。

社会福祉法人愛護会 静山園では、「気づき」「記録」「検証」の繰り返しを基本としながら、状態像の変化に応じた支援を心がけられている。重度・高齢の利用者への支援では「建物、設備等のハード面での改修」「医療や食生活との連携」「利用者目線での関わり」が特に重要であると述べられている。

今後の障害者福祉を取り巻く現状としても入所施設等の利用者的高齢化、重度化が進んでいく事が予測されている。そのような中で、一人ひとりの状態像をしっかりと観察しながら入所施設ができる最善の支援を行えるよう組織として取り組んでいく必要がある。

第2節 知的障害者の高齢化に伴う、居住支援について

第2節では、知的障害者の高齢化に伴う居住支援についてみていく。平成24年度日本知的障害者福祉協会によって『地域における高齢の障害者の居住支援調査等の在り方に関する・研究』がなされた。この研究は、知的障害と精神障害のグループホーム・ケアホーム利用者や在宅者においては、利用頻度は少ないが、介護保険サービスの訪問介護や通

所介護などの利用が確認されている。

今後は障害者福祉サービスとともに介護保険サービスの活用も視野に地域におけるサービス基盤の整備が必要と考えられる。

グループホームとケアホームの一元化や外部サービスの利用の見直しが図られる中、今後の高齢障害者への支援体制が検討される必要がある。グループホーム等での日中支援を含む新たな支援サービスの検討、相談支援体制の強化、移動支援の個別給付化、行動援護の基準緩和、重度訪問介護の拡大などの課題は多い。地域の状況に応じた多様な支援が重層的に構築される必要がある。「小規模入所施設」についても地域におけるセーフティーネットの一環として創設することも対策の一つと考えられる。地域のサービス基盤整備とネットワーク化の中でその位置づけについて、十分な検討が必要であるとされた。

第3節 知的障害者の高齢化に対する構成労働省による検討

第3節では、知的障害者の高齢化に対する厚生労働省による検討についてみていく。厚生労働省によって、知的障害者の高齢化対応検討会報告書が発表された。この報告書は、平成12年度1月24日から6月21日の間に計7回の知的障害者の高齢化対応検討会が行われた内容がまとめられた内容である。この会議が設けられた背景としては、知的障害者の福祉施策に関して、知的障害者の地域生活の支援の強化、日中の活動の場の確保、施設サービスの質の確保と権利擁護を今後強化していくべき問題であると提言されたことによるものである。

これらの中で知的障害者の更生施設の入所者の高齢化についても対応を検討する必要がある、という意見が出されたことにより、会議が設けられた。

全7回の内容をまとめた報告書からは、①地域生活支援について。②知的障害者施設における高齢化への対応について③高齢者施策の活用と連携についての大きく三つに分けられ、まとめられた。

高齢化した知的障害者について、従来、心身の変化に応じた健康の保持や安定した生活に力点が置かれ、入所施設による処遇を重視する傾向があった。しかし、支援体制を整えることによって、地域生活も可能であり、それがノーマライゼーションの理念にも沿うものとされている。そのため、今後は、地域での主体的な生活の確保を支援する施策を積極的に推進すべきと記載されている。

問題点の一つとしては、ホームヘルプサービスについて挙げられた。対象が重度者か

ら中軽度者にまで拡大されたが、今後のヘルパーの質や量の充実が課題であるとされた。特にホームヘルパーの質として、知的障害者の障害特性に十分理解のあるホームヘルパーの養成・研修を進めていくことの重要性についても記されていた。そのため、地域生活の支援の強化の必要性があるということがわかった。

知的障害者施設における高齢化への対応については次のように述べられていた。知的障害者の施設においては、これからの高齢化への対応を含め、施設外のサービスの利用を推奨していく必要がある。また、それらと同時に施設の構造設備、職員配置の面でも高齢化に対応した配慮が必要とされる。そして、今後の課題として、身体障害との重複化等により、入所者の身体介護のニーズが増大することが推測される。その上で、職員配置基準上の直接処遇職員として、介護職員を算入できるようにすることについて検討する必要がある。また、高齢知的障害者の援助については、個々の入所者にあった多様なプログラムに基づき、柔軟に対応することが重要ともされている。

最後に、高齢者施策の活用と連携について次のように述べられていた。高齢知的障害者も介護保険サービス等の高齢者サービスを円滑に利用できるようにする必要があるとされている。

また、知的障害者施設に高齢者施設を併設することにより、知的障害者が、そのニーズの変化に応じて、円滑に高齢者施設を利用できるようにすることも考慮する必要があるとされている。

第4節 知的・発達障害者の高齢化と支援の課題について

障害者の高齢化による状態像の変化に係るアセスメントと支援方法に関するマニュアルの作成のための研究より、祐川暢生（2020）によると、知的障害者の高齢化にともなう様々な変化と、その変化が起こる時期や必要な支援に関して、40～50代には、「認知症も含めた認知機能の低下が早期からみられる」「身体機能の低下に伴い歩行不安定、転倒リスクが高まる」「精神的な不安定さが見られるとともに、他傷行為や暴言などの行為が見られる」等の事例が明らかになった。そして、上記のような健康状態の変化によって発生することとして、「自発性や意欲が低下することで活動や参加に影響が生じる」ことが多かったと述べられている。そして、60代には、「個室への移動や住まいの変化」「家族や友人、支援者など、信頼関係のある大切な存在を失う場合が多い」等の環境面の変化に関する事例が多くあると述べられていた。

これらの研究から、高齢期前からの支援に必要な支援開始から看取りまで見えやすくするための「ライフマップ案」を作成が大切であると述べている。

また、健常者の高齢者が認知症になった場合と知的障害者、発達障害者 認知症のような子同上・心理上の症状が出てきた場合の比較をすると、若干の違いがあると述べている。

知的・発達障害故にあるもともとの実行機能障害のあるものたちが病気として認知症になったのか、加齢による機能低下による認知症的なものなのかについて判別が難しく、グレイゾーンのようにであると述べられている。支援観点では、認知症の有無は二次的なことであるため、診断の有無よりも本人の行動心理症状にどのように適切に対応すべきなのかを考えていくことが重要であると述べられた。

第5節 先行研究のまとめ

先行研究では、以前までは施設中心で行われていた知的障害を持つ高齢者の支援であったが、ホームヘルプサービスの拡充やその他の支援体制を整えることによって、地域生活も可能であり、推進されていくべきであると述べられていた。そのため、今後は、地域での主体的な生活の確保を支援する施策を積極的に推進すべきと記載されている。

また、知的障害者の高齢化において、健常者の高齢化とは異なり、知的障害への支援、高齢化による身体面等の変化に柔軟に対応することができる支援が重要であると述べられていることがわかった。

第2章 インタビュー調査研究

第2章では、昨年度社会福祉実習をさせていただいた、社会福祉法人ライフサポート協会就労継続支援B型事業所オガリ作業所でのインタビュー調査の分析結果について記していく。

第1節 調査概要

1. インタビュー調査の概要

社会福祉法人ライフサポート協会オガリ作業所の支援員Aさんに2023年6月7日(水)に住吉総合支援センターにて、16:00から18:00の間にインタビュー調査を行っ

た。インタビュー調査の質問項目は以下の通りである。

1) Aさんの経歴について

- ・オガリ作業所にどのくらいの年月勤務しているのか。
- ・オガリ作業所の前に勤めていた高齢者施設にはどのくらいの年月勤務していたのか。
- ・利用者との関わりについて（何年の付き合いになるのか。特に今回の対象となる知的障害者の高齢者とはどのくらいの期間支援に携わってきたか）

2) 利用者について

- ・長期間通所している利用者が年齢を重ねていくにつれ、どのような変化をしてきたのか？
- ・高齢化していく中で知的障害とは違う症状は出てきているのか、それはどのような症状か。
- ・知的障害とは別の症状では就労に変化を及ぼしているか。
- ・利用者は自身の高齢化についてどのように認識していると考えられるか？
- ・高齢化していく利用者に対して支援にどのような変化があるのか。また、どのような支援が求められていると考えるか。
- ・もし、就Bの事業所での就労ができなくなった場合、利用者はどうなるのか。

3) 高齢化について

- ・健常者の高齢者と知的障害者の高齢者の違いをどのように感じているか
- ・同じ法人内でも知的障害者に対する理解の違いがあるのはなぜか。
- ・高齢化していく知的障害者に対する支援の課題と問題点とは？

4) 地域で暮らす知的障害者について

- ・高齢化していく中で、一人暮らしとグループホームどちらが望ましいと考えられるか。一人暮らしはグループホームに移行した方が良いのか。
- ・一人暮らしの利用者が高齢化していく中で、支援していることはあるか。（生活面）
- ・知的障害者が地域で高齢化が進んでも住み続ける地域、支援とは。
- ・知的障害を持つ高齢者専門の施設についてどのように考えているか。

5) ソーシャルワーカーとして

- ・知的障害者の高齢化が進んでもその人らしく暮らせるようにソーシャルワーカーが出来ること、求められることとは。

・高齢化していく知的障害者とのように向き合っていくか、心がけていることは？

2. 調査対象施設の概要

ライフサポート協会オガリ作業所は大阪市住吉区にある就労継続支援 B 型事業所である。就労継続支援 B 型とは、通常の事業所に雇用されることが困難であり、雇用契約に基づく就労が困難である方に対して、就労の機会や生産活動等の機会の提供、また、その他の就労に必要な知識及び能力の向上のために必要な訓練・支援を行う事業所及びサービスである。

就労継続支援 B 型とは、障害のある方が、一般企業に就職することに対して不安があったり、就職することが困難だったりする場合に、雇用契約を結ばずに生産活動などの就労訓練を行うことができる事業所及びサービスである。

障害者総合支援法で定められた国の就労支援サービスのひとつであり、就労の機会の提供や就労に必要な能力の向上を目的としたもの事業所である。

オガリ作業所は 1989 年住吉総合福祉センター内の地下にオガリ作業所（無認可）が開設された。住吉総合福祉センターの利用者や地区内外の在宅で活動の場を求めている障害者の軽作業などを通じて社会参加の活動を開始されていた。その後、無認可作業所だったオガリ作業所は 2002 年に「小規模通所授産施設」として認可され法人運営の傘下に入ることになった。

この 2 年後に、オガリ作業所の知的障害者通所更生施設認可されと住吉東駅前の現施設への移転となった。2007 年には障害者福祉制度の変更に合わせて「生活介護」「就労継続支援 B 型」に移行された。重度の障害者や作業に取り組みたいと考える人に向けて、製パンや清掃といった作業を通じ、多様な状況の人が活躍している。現在のオガリ作業所就労継続支援 B 型事業所としては、「清掃班」「パン班」に分かれ、活動している。

A さんはオガリ作業所に 2010 年～現在まで 12 年間勤務している。また、以前 A さんは同法人内の高齢者施設にも 1 年 9 か月勤務された。

オガリ作業所の利用者とは、A さんが勤務されてからの 12 年間の付き合いになる利用者が複数人存在している。

第 2 節 調査結果と考察

第 2 節では、調査結果の概要と考察について述べる。

1. 高齢化に伴う実態

1.1 生活の変化

第一に知的障害者の経年による生活の変化があることがわかった。Aさんは次のように語っている。

樽本：利用者が年齢を重ねていくにつれてどのような変化がありましたか

Aさん：年齢を重ねていくにつれての変化ですか。えーっと、行動としては、落ち着かれているかたが多いと思います。ご本人さんの行動としてはそのような感じなんですけど、高齢になるにつれて、身体の体調不良というものが増えてこられる方があった。複数名あった。

ご家族の状況もこの12年で変わってこられてて、12年前はどなたもご家族さんがお元気で、ご家族さんがご本人を見る、キーパーソンであった。そのうち、5名中3名の方が介護が必要になり、お二人はガンを患われたり、糖尿によって足を切断されたり、ご家族が加齢によっての変化があり、ご本人さんの生活も左右されるという状況が生まれています。ご本人さんが高齢になってどうというより、ご家族さんが…という部分が多い（中略）共にお年を召されるので、ご本人さんが加齢に伴って、高血圧になられたり、糖尿を持たれることもありますし、あの、ご家族さんが高齢になられるがゆえにご本人さんの生活に大きく影響を及ぼすようなご家族の変化もありますね。

知的障害を持つ利用者の加齢による、本人の変化はある一定は見られるようだ。しかし、その変化よりも大きい変化としては、それまで本人を支えてきた家族の加齢による変化である。知的障害者が年を重ねるということは、その周囲の家族も年を重ねるということである。親の場合、知的障害を持つ子よりも年を重ねているので、知的障害を持つ子供よりも早く介護が必要な状況になることは明らかである。これらの話から高齢化による、「老障介護」の現状が垣間見えた。

1.2. 認知機能の変化

第二に、知的障害者は高齢化により、認知機能が低下し、コミュニケーションの場において、困難になっていることがわかった。私は昨年度の社会福祉実習の際に関わりがあ

った利用者 B さんの認知機能低下の事例を A さんに伺った。

樽本：たとえば、昨年度の社会福祉実習の際、お話を伺ったときに、利用者 B さんが前までは穏やかな方だったけれども、少し物忘れがでてきてしまう、少し、ちょっと怒りっぽくなってしまったというお話を伺ったと思うのですが、そのような変化について

A さん：そうですね、もともとね、もっと怒ってはったんだけど、えっと落ち着いておられたところ、ご本人さんのやっぱり認知機能が落ちてこられているであろうと、思う状況がここ 3 年ぐらいあって、徐々に徐々にわかりづらい物忘れが増えているというところで、余裕のない状況があって、言葉のやり取りがうまくいかなくなってきたときにキレやすくなっているというところがあると思いますね

自身に余裕が持てない場合に、言葉のやり取りができないもどかしさから怒りの感情が表出し、対人関係でトラブルが生じやすくなっているという現状が明らかになった。

利用者 B さんが認知機能が落ちているために起こった対人関係のトラブルについて A さんは以下のように述べた。

樽本：具体的なエピソードとあって

A さん：具体的なエピソードは、たぶん認知機能がずいぶん衰えておられるとか、それによって、気持ちに余裕がないとか、慌てたときに以前に比べて、より一層焦燥感に強く駆られておられるようなときに

清掃班のジアノックの容器あるじゃないですか。個人で名前が書いてる容器があって、それを一斉に保管している場所あるでしょ、そこから、自分の分を見つけられなかったのか、人のものを取り違えたときがあった。で、人のものを持って行ってしまった。おそらく B さんがその発端であったんだけど、持っていた相手の方が、自分のない、おそらく B さんが自分のものをもっていかれたであろうという予想のもとから、B さんのものを持っていかれた。相手の方からすると、臨機応変な対応をしていただいたが、そのときにスタッフに声をかけてくれてたらよかったという清掃班側の理由があるけれども、B さんが自分の分を相手の方が持って行ってるということに気付いたときに酷く怒ってしまったんです。

おそらくことの発端はBさんがお間違えになったか、自分の分が見つからなかったか、ほぼ同じ量、同じ形状のものを持って行ってしまっているんですね。準備の時点ではBさんが先に間違っているのは明らか。…急にBさんが相手の方に手まで出してしまって、たたいてしまうということを起こしてしまった。」

そのあと仲裁に入って、落ち着くように声をかけていた私に対しても、暴言、手を出してしまうということがあった。それはここ数年では一番大きな出来事。そういうような自分が忘れっぽくなって忘れてしまった事柄であったり、自分はある、自分の行動は間違っていないと思っているけど、周りのせいにしてしまって、周りを傷つけてしまうというのは多くある。」

また、Aさんは認知機能低下の事例の例をもう一つ挙げ、認知機能の低下が原因でコミュニケーションに問題が生じるようになったと話された。

Aさん：もう一個簡単なエピソードでいくと、スタッフとの言葉のやり取りが最近は難しくなっているときがあって、ちょっとニュアンスで伝えるというか、作業の追加作業をたとえば、作業時間が20分余りました。20分くらいあったら、たとえばこのお部屋の机をふいといて欲しいとか、陶芸室の窓だけ拭いておいてほしいとか簡単な作業を追加でお願いをしたときに、『他にもこれしやなあかんからできひんわ』とご本人がおっしゃった。それを受けて職員が『じゃあいいです』と、しなくて良いというニュアンスの言葉を返しているけれども、それがもういいよと言われているととらえられない。以前だったら、あんまりそういう言葉のやりとりの違い
ってあんまりなかったけれども、しなくていいですよ、大丈夫ですとはっきり言わなかったときに何度も言葉のとり違いをされて、それでもやれと取ってはる、その職員さんにできないと再びいうことをあきらめ、事務所にいる私のところにいいにこられて、追加でこれやれって言われたけれども、『僕これもやらなあかんからできひんわと』とちょっと怒ったようにいらっしゃった。明らか興奮されてるなという感じがした。そんなに興奮することでも、怒るようなことでもなくて、やれといわれたように感じたのなら、できませんともう一度いえばいい話なんだけれども、そこが難しくって。私に言いに来たからよかったけれども、2、

3か月に一回くらい、そんなに高い頻度ではないけれども、スタッフの言った言葉を取り違えているなどということはありませんね。

知的障害者の高齢化によって、起こる変化として、認知機能の変化が挙げられる。上記のインタビュー内容から、認知機能の低下によって、対人関係のトラブルが多くなってきているということがわかった。認知機能の低下により、支援者や他者が伝えようとしていることが上手く伝わりにくい、伝えようとしても、その前に怒り、焦りなどの感情が先に出てしまい、制御が困難になってくるということがわかった。このような認知機能の低下が起こっている場合には、本人が分かりやすい、焦らないようにより一層の丁寧な声掛けなどが支援において重要になってくることがわかった。

1.3. 身体的な変化

第三に、知的障害者の高齢化にとって起こる身体的な変化が起こることがわかった。身体的な変化が健常者の身体的な変化との違いについてわかった。Aさんは以下のように述べている。

樽本：オガリ作業所ではBさんが一番ご高齢で、その次がCさんですよ。Cさんはどうですか？

Aさん：(中略) …身体の状態がCさんは変わってこられてて、体重がしっかりあって、身体が大きいのは以前からなんです。膝が関節が擦り切れて痛くなってこられて、腰が痛い。膝、腰が痛い故に、痛み止めの薬のロキソニンを飲まれるということがあった。…ロキソニンを続けて飲んでってはって、どうもロキソニンで胃を壊しやすかったみたいで、一昨年二月かな、オガリで夕方頃、大量の吐血があって、救急搬送されたってということがあってんだけど、やはり加齢が故の部分があってロキソニンを飲んだ。ロキソニンで胃を壊した、胃を壊すっていうのが、そこはまた、高齢とは別に、知的障害の部分があってわかりづらかった部分があったんだけど、あの、普通であれば、あれだけ吐血する前になんらかの症状を自覚されていてもおかしくないと思う。かなりの量の吐血やったからね。私の目の前で、死んでしまうんじゃないかって思うくらいの吐血をされたんです。なんで、その直前、気持ちが悪かったとか、何日も前から胸がつかえるような思いがあったと

か、調子が悪いと感じていてもおかしくない状態だった。絶対戻しそう、吐血し
そうってなる前までに自覚症状がなかったって本人さんは言うんです。ひょっと
したら我慢していただけないかもしれないけど、何回もお伺いしたけれども、なにも
思っていなかったと。もともと痛みや身体症状に対して鈍感だったり。たとえば
咳をしているという状態があっても、スタッフに言わなかったり、というような
言うべきだという認識が甘いのかな。そこは知的障害があるが故だと思うけど。
発見が遅れて、大量の吐血をするまでに至ってしまったということがあったん
で、そこらへんはやっぱり高齢になられて、身体的な変化たとえば、ご病気を持
たれるようになったことに対して、言葉でのやり取りができる知的障害の方でも
それが周囲に十分に理解されないのかなというのがありますね。

また、Aさんは重度の知的障害者の利用者についての事例も述べられた。

Aさん：重度の方でも、数年前にもうわかった時には胃がんの末期の状態、あのもう手
の施しようのない状況で、数週間で亡くなられてということもあったんで。その
方もなんらかの段階で、ご本人さんが自身の症状が言えていたら対処が変わって
いたのかもしれない。医者にも定期的にかかっていたし、作業所にも毎日通所さ
れている方だったけど、そこまで、かなりの身体症状が出た段階でやっと分かっ
た状態だったんで。そこが、知的障害の方が高齢になられて、ご病気を持たれた
ときに難しいところだなと思いますね

高齢化により、身体的な変化が現れる。このことは健常者も知的障害者も差異はない。
知的障害者は身体的な変化が現れることによってどのような困難を抱えることになるのか
についてインタビュー調査の結果からわかった。知的障害者は自身の不調を周囲に伝える
ことが難しい場合や自身の不調に気付くことができず、そのまま手遅れになってしまうケ
ースが存在していることを知ることができた。このことから、知的障害者が高齢化してい
く中で、支援者は知的障害者の健康において念頭に置き、様々変化について観察しておく
必要があることがわかった。

また、健康状態においても、健康診断のみならず、適度な食事と健康が求められ、その
ための支援についても今後重要視されていくべきではないかと考えた。

1.4. 加齢による認識

第四に、知的障害者自身の加齢による認識については知的障害の程度によるということがわかった。Aさんは知的障害の程度による認識の変化について以下のように述べている。

Aさん：それは知的障害の程度によると思いますわ。軽度であれば、軽度であるほど、自分の以前が出来ていたことが出来なくなったとか、これくらいのことしんどくなかったのにしんどくなっていたなあなどの以前との比較ができる、できないを含めてね。年いってきたからしんどなってきたわなどの自覚を持てると思います。

実際、知的障害が軽度よりの利用者Bさんは『清掃の仕事、今はできるけれども、年を取ってきた身体がしんどくなってきた。そういう部分が感じるな』と発言されているとのことであった。このことから利用者Bさんは高齢化に対して認知はできていると推測される。

知的障害が比較的重度よりの人であると、今の自分の状態とこれから老いてく自分の状態を想像することが難しいため、今、いつも通りのことが出来ていれば、自分には大きな変化は自覚されていないように感じられるとのことであった。身体的症状があつて、人から年を取ったからだと言われて初めて理解する。高血圧になっているなどの理解ができているかなどはまた、別の問題になっていくとのことであった。

知的障害者が高齢化を自覚している、自覚していないでは、知的障害者の行動に変化もたらされるだろうと推測される。このような本人の認識を念頭に置きながら支援を継続していくことが重要であると考えられる。

2. 高齢化に伴う支援の変化

2.1. 高齢化問題に配慮した支援と連携

1.4.加齢による認識では、支援者から見た利用者の認識について尋ねた。次に高齢化していく利用者に対して支援にどのような変化があるのか。また、どのような支援が求められていると考えるかについてもAさんに尋ねた。すると、体力的な変化が表れており、そ

のことは就労継続支援B型事業所としても運営形態を変化させるきっかけの一つにもなったことがわかった。

インタビュー当時、オガリ作業所の清掃班のメンバー全7人のうち、5名が40代以上になる。Aさんが関わってきた20年間で、利用者の高齢化によって支援の変化があったとのことであった。

Aさん：以前出来ていた作業ができなくなっていると感じることがあれば、一人一人によって変えてはいていますね。作業の度を減らしたりとか、体力的にしんどいので、どうしても体力的にペースがゆっくりになってしまったりとか、作業の準備をするにも時間がかかったりとか。そういう時間的なものを考慮して、今までだったら二時間の間に三つの作業ができてたかもしれないことをこの人の時には2つにしとこかとか。体力的負担の少ない作業に多く回そうかとかいうようなことがあります。

清掃班としては、体力的に衰えてこられたというところをその方にとって考慮擦る必要があると認識してそれぞれ個別の支援の一つに入るという感じになりますね

オガリ作業所では、利用者の高齢化による体力面の変化に対して、その人の体力に対応した作業を提供することを個別支援の一つであるとされていた。個別支援の面以外での清掃班全体の支援としては以下のように述べられた。

Aさん：12年5人見てて、5人が5人みなさん高齢になられている。(中略)作業の時間数自体を班として減らしたんです。去年。(中略)そこらへんは班全体として割合的に高齢になってこられる利用者さんが増えて、清掃班として朝昼夕の作業を保っていくことが難しくなってくるという状況に直面して、夕方の作業を皆さんなしにさせていただいて、朝、昼の作業ですね。具体的にいうたら、10時から17時半までの作業をしていたところ、10時から15時までの作業に変えさせてもらいました。そこらへんで体力的にみなさん楽になられた。

また、家族の変化によっても利用者が作業に入ることができなくなったということも

挙げられていた。

この二点のことから、個別の支援だけではなく、過半数が高齢化しているオガリ作業所では、班全体としても作業の時間を減らすという対応が行われていた。

2.2. 就労以外の居場所

私は就労継続支援B型事業所での就労ができなくなった場合、利用者はどうなるのか。という部分が気になり、Aさんに尋ねた。

現状としては、オガリ作業所を利用されているが、将来は介護保険サービスの利用や日中支援は引き続き必要になっていくだろうと話された。毎日の食事の確保、服薬確認（現在は作業所で行なわれているものを含む）を介護保険サービスに移行していく必要がある。

オガリ作業所の生活介護を利用されていた70代の生活介護の利用者は一部介護保険サービスへ移行。ヘルパーの利用、介護保険のデイサービスを週1で利用しているとのことであった。

オガリ作業所の就労継続支援B型事業内で一番高齢の利用者Bさんに関しては介護保険は非該当で、障害福祉サービスを利用しているとのことであった。知的障害を持ち、高齢化した方に対する、サービスとしては、ひとまずは介護保険サービスのみ足りない部分は障害者福祉サービスを利用（併用）するようになるということだった。

2.3. 高齢関係施設に求められる支援

支援者として高齢者施設でも勤務経験のあるAさんに知的障害者の高齢者と健常者の高齢者との違いはあるのかと質問した。するとAさんはあると答え、以下のように述べた。

Aさん：あーあるね。利用者Bさんくらい知的障害が中程度だけど、軽度よりの方は比較的、ある程度一般的な社会生活を、年をとりはるまでしてこられた方と本来法人内の高齢者施設にいらっしゃるようなある程度一般的な社会生活を送られて、年をとられて60代以降やんね。70代以降といってもいいかもしれないけれども、認知症になられて、高齢者施設に入られて、通われるようになったかたと、生まれ持って知的障害があってもまあ通常の世界生活とは少し離れたところで生き

てこられたかた、常になんらか大人の見守りがあるというか。常に知的障害が故に周囲、社会生活を十分行ってこなかったとはいわないけれども、一般的でない生活をなさってこられた方とでは、本人さんの認識の違いがあるというところが大きいかな。認知症になられても、やはり通常の社会生活を送ってこられたうえで身につけた価値観が十分残ってらっしゃることは多いし、よほど認知症重度になったり、言い方適切でないけど、人格崩壊といわれるようなことがおこらない限り、美しいものを見て美しいとわーってなるとか、汚れているものを汚れていると感じ、綺麗にしないとと思うとか。汚いなと感じるとかというようなところは割と長年培ってこられた方、部分が多く残っていて、その価値観でもって十分そのコミュニケーションが成り立ったり、生活能力で生きておられる方って認知症の方には多くいらっしゃる。

(中略)

…そういうような当たり前の感覚やんね。認知症になられても十分持ってらっしゃる。知的障害を持たれる方ってというのは、特に発達障害も伴っていらしゃると独特の感性で生きてこられている。それは生まれたときから。ってなってくるとやっぱり、こう当たり前に美しいものを綺麗だなと思うような感覚が十分持てないまま生きてこられている。

(中略)

…高齢になってこられたからそれが同じように一般社会を生きてこられた方と同じような感覚が持てるようになるのかってそれは持てないわけね。そのあたりは独特の感覚・感性で生きてこられたままお年を召されてというところがあるので、高齢になってこられたがゆえの支援と知的障害のある方独特の支援っていうの二つは全部セットでやっていく必要があるっていう部分は感じるよね。

昨年度の社会福祉実習において、同じ法人内の施設であっても、障害者施設、高齢者施設で同じ障害者観があるとは限らない。知的障害に理解があるとは言えないと学んだ。

今後、知的障害者が高齢化するにあたり、高齢期に入所や通所する可能性のある高齢者施設において、どのような支援が求められるのかについて明らかにした。

Aさんは高齢者施設に入った際の知的障害者の困難について以下のように述べた。

樽本：前実習のときにお話を伺ったとき、高齢者施設の職員の方が知的障害の方への理解があるわけではないという話を伺ったと思うんですけど、そのないってことは高齢者施設に言っても理解してもらえないってことですよね。

Aさん：それは大いにあると思う。通常もともと健常者の方がたくさん認知症があったり、介護が必要になってデイサービスに通われるようになった方が大半のデイサービスに行かれたら、清掃班のメンバーさんはある程度は会話ができたりするので、ある程度は大きな難しさはないのかもしれないけど、知的障害独特の行動であったりとか感性がゆえにしんどいということが理解されない故にご本人さんがしんどさ感じるやろなって想像しますね。

知的障害独特の感覚過敏や聴覚過敏に対しての理解があれば、その嫌な空間に対して配慮することができる。その配慮が高齢者施設の職員では難しいのではないかと述べられた。

そして、同じ法人内でも理解が得られていないということをAさんは以下のように述べられた。

Aさん：（法人内の高齢者施設の）トイレの作業をしておられて、あの、中に入ってはる人がいたら一旦外に出て行ってほしい。ゆっくりトイレひんから。ということがあったり、マスクしてない。マスクするべきだろうというお声がかかったり。ていうようなところが当たり前にお伝えをしてくれる。それが利用者さんにとって当然理解できると思ってらっしゃるんですよね。だけれども、知的障害が故に息苦しさを私たちと違うくらい感じておられる。で、なかなか付けられない。つけるということの意味も理解が十分でないということをお分かりじゃなかったら、ただただマスクしてないやんって怒られるだけになるんですよね。しましよと言われ続ける。でもご本人さんは言葉が巧みじゃない、上手じゃないので、それに対して自分がどうしてそのマスクをするのが難しいのか、今できていないのか、それにトイレ入っているときに出て行ってほしいというような配慮が必要なのかということと言えない。ただ要求を突き付けられるだけになってしまうっていう。

同じ法人内の高齢者施設だとしても、高齢者施設の職員は障害のプロフェッショナルではない。同じ法人内でも知的障害への理解を得られることはなかなか難しいということであるということがわかった。

Aさんは知的障害者の高齢者の方への支援の課題として、今の社会と同じであると述べた。同じ社会構造は高齢になっても、高齢者の社会構造の中では変わらない。社会的少数者であるということには変わりないとされた。周囲の理解がなかったら、制度があっても難しいであろうと話された。

終章 結論

本研究の目的は、知的障害者の高齢化によって変化する生活実態と支援方法を明らかにすることである。この研究を明らかにするために、知的障害者の高齢化に関わる先行研究を整理した結果。社会福祉法人が運営する就労継続支援B型事業所の職員に対してインタビューを行った。

この結果、高齢化に伴う生活実態としては1) 加齢による変化、2) 認知機能の変化、3) 身体機能の変化、4) 加齢の自覚、支援方法については、1) 高齢者問題に配慮した支援と連携、2) 就労以外の居場所、3) 高齢者化に伴う高齢関連施設に求められる支援、が明らかになった。高齢化によって、認知機能、身体機能の低下と加齢の自覚といった生活実態の変化、高齢化問題に配慮した支援と高齢関連施設の連携の必要性があることがわかった。

私の行った先行研究とインタビュー調査では、知的障害者の高齢化において、支援は健常者の高齢者と同じ支援ではなく、知的障害特有の支援と高齢化による身体的な面なども考慮し、配慮した支援が必要であるということが共通していることわかった。

先行研究とインタビュー調査を用いて、本研究では、知的障害者の高齢化による課題について認識することができた。先行研究に関しては1900年代から2000年代のものまで多岐にわたるが、一貫して課題点は変わっていない。インタビュー調査において、高齢者施設における障害者への理解の低さについても話題に上がった。今後、障害者の高齢化も加速すると予測される。知的障害者の高齢化において必要とされる支援としては、認知機能や身体機能の変化や従来生まれ持つ知的障害について考慮しながらのより一層強化された個別支援であると考えられる。

先行研究では明記されていなかったが、今回のインタビュー調査から新たに発覚した高齢者施設における障害者への理解の低さにおける課題に関しては、施設職員の障害への理解、高齢者施設に行くという選択肢だけではなく、社会全体への障害への理解と共に、高齢化に特化した障害者の通所施設や入所施設の利用という選択肢を増やしていくということが必要とされるだろう。

(40字×30行 16158字)

参考文献

厚生省・知的障害者の高齢化検討会(2000)「平成12年知的障害者の高齢化検討会報告書」

(<https://www.ipss.go.jp/publication/j/shiryou/no.13/data/shiryou/syakaifukushi/811.pdf>, 2023.10.8)

厚生労働科学研究費補助金 疾病・障害対策研究分野 障害者政策総合研究/日誌正文(独立行政法人 国立重度知的障害者総合施設 のぞみの園 総務企画局 研究部)「令和2(2020)年度障害者の高齢化による状態像の変化に係るアセスメントと支援方法に関するマニュアルの作成のための研究」(2021) / (<https://mhlw-grants.niph.go.jp/project/148054>, 2023.12.10)

厚生労働省 (2021) 社会保障審議会障害者部会 (第116回)「高齢の障害者の支援等について」(https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000195428_00042.html, 2023.10.7)

社会福祉法人愛護会・障がい者支援施設 静山園・入所支援部長 高橋智宏 (2016)「知的障害の方の加齢における現状と課題～入所施設での支援から考える～」

公共財団法人日本知的障害者福祉協会 (2012)「厚生労働省平成24年度障害者総合福祉推進事業指定課題29『地域における高齢の障害者の居住支援等の在り方に関する調査・研究』」

(<http://www.aigo.or.jp/choken/pdf/24suisin11.pdf>, 2023.11.23)

社会福祉法人ライフサポート協会「オガリ作業所」

(<https://www.lifesupport.or.jp/lifesupport/shisetsu/ogari.html>, 2023.12.10)

内閣府「令和5年版 高齢者白書 (全体版)」

(https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2023/zenbun/05pdf_index.html, 2023.10.7)

〈謝辞〉

本インタビュー調査にご協力してくださいましたオガリ作業所のAさんに深く感謝申し上げます。また、基礎的な方法から論文を書き上げるまで。丁寧にご指導してくださいました鈴木良先生にも心より感謝申し上げます。ご協力くださいました皆さま、本当にありがとうございました